
紅茶と僕のモラトリアム

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅茶と僕のモラトリアム

【Nコード】

N3054J

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

失恋と会社の人間関係に疲れ果てた僕はある日会社を辞めた。そんなある日、町で偶然見かけた喫茶店で買った紅茶を飲んだら、僕は不思議な世界に迷い込んだ……。村上春樹の作風を意識したオマージュ作品です。全然似てないとかその類の苦情は感想欄にて受け付けますw

おや、こんなところにこんなお店があったっけ。

僕は、暇つぶしに歩いて自分の町の片隅に、小さな、そして瀟洒な一軒の食料品店を見つけた。そこは食料品店と言うよりは小さな喫茶店と言うべきか、店の前に商品を綺麗に整頓して並べ、扉は開いたままで、建物はレトロな西洋風のレンガ造りで、店内の奥にはテーブルと椅子が並んでいるのが見える。

こんな店、いつ出来たんだろう。受ける印象はもうここで何年も商売をしています、というものだが、全く僕の記憶にはない。たまにしか通らない駅からの抜け道的な場所だが、この店は初めて見た。並んでいる商品を見ると、紅茶のティーバッグがあり、値札のシールに¥300と書いてある。手にとって見ると20袋入りとあるから、安いほうだろう。名前は「WHERE GET HOPE TEA」と言うものらしい。よし、買おう。ちょうど紅茶は切れそうになっているはずだし。店の中には白いコック服のような物を着た女性が一人で入り口すぐのレジの前にいた。肌が白く、愛嬌のある可愛らしい細面の女性だ。

「こんにちは、このお店はいつオープンしたの？」

と聞いてみると、いつかはわかりませんが、昔からあるみたいですよ、とはきはきとした声で返事が帰って来た。そうですか、と納得したふりをして商品を袋に入れてもらい、店を出た。振り向いてもう一度あの女性の顔を見たい気がしたが、やめておいた。

空は青く、無限の広がりを感じる。同時に、僕の時間も有り余っている。僕は、一週間前に勤めていた製薬会社を辞めた。この不況時に耐え難い営業ノルマを背負わされ嫌気が差したのもあるが、十数年で完全にこの会社自体に愛想が尽きていた。うわべだけの人間関係、派閥争い、醜い誹謗中傷合戦。どこにも参加したくない僕に

は耐えられなかった。

付け加えて、彼女に浮気されていた事もショックだった。浮気どころか二股をかけられていた。

「私、子供が出来たからタカトシさんと結婚することにしたから、ごめんね」

一体何を反論すればいいのか。僕は何も言えなかった。ただただ悲しくて泣いた。

仕事を辞めた後の事も考えていなかった。今は無為に羽を伸ばしているという状態だ。お金のかかる類の遊びは生来興味が無く、大学を出て就職したあとせっせと貯金を溜め込んでいたので、数ヶ月程度なら失業保険がおりなくても特に困りはしない。色々なことをぼんやり思い出しながら、ため息をつきながら歩いて、やがて家に辿り着いた。古ぼけたワンルームマンションの一階へ潜り込み、ほっとする。なんとなく体がだるいのは何故だろう。気が抜けてるからかな。僕は苦笑して、早速散歩がてら買った雑誌などを開く。ともあれ、今はこうして一人で気ままに過ごすのが一番楽なのだった。

そうだ、あの紅茶を入れよう。ポットのお湯をマグカップに注ぎ、熱い紅茶にミルクと砂糖を入れ、静かな午後を楽しむ。飲んでみると独特の味がする。ダージリンティーに近い、苦味とはつかのような舌が涼しくなるような甘さが混じっていると云うか。面白い味だな、と思って飲み干し、横になってテレビなど見ていると、やがて眠気が襲い、僕は午睡にまどろんだ。

* * *

目が覚めると、僕はまず激しい揺れに驚いた。次に、目に入る風景にも慄いた。岩が支配する圧倒的な、そして典型的な荒野だ。付け加えて異常に暑い。まず振動の謎はすぐに解けた。僕はなんと馬

車に乗っているのだ。前には従者のような者がいて、たまに馬に鞭をくれている。一体何が起こったのかわからない僕は、前の人間に話しかけた。が、聞こえないのか返事がない。座っているのも硬い木材で出来た椅子だし、何度も跳ね上げられてお尻が痛くなってきた。馬車にはほろが被せてあるが、顔を襲う直射日光の前に何の役にも立っていない。

「ねえ、あなた、僕はどこへ連れて行かれてるんだい」

声をかけてようやく気づいた。この従者、尻尾がついている。僕はぞつとして黙った。代わりに、ひたすら景色を眺めた。馬車は荒野を抜け、生い茂る雑木林のくぐり、どんどんと山岳を乗り越えていく。口の中にかすかにあの紅茶の味が残っているのを感じた途端、馬車は止まった。相当高い場所まで上ってきたそこには、大きな古城が建っていた。いや、古城跡と言うべきなのか、建物の随所に崩れや荒みがある。ともかく停止した馬車から降りると、ふらついて膝を着いてしまった。そこへ、

「お待ちしておりました」

と声がかけられた。そこには、花模様をあしらったフリルのついた民族衣装のような服装をした一人の女性がいた。顔に見覚えがある。数時間前にあの食料品店で店番をしていた女の子じゃないか。つたの茂る趣向を凝らした彫刻の彫られた門扉の前でにこやかに微笑んでいる。八重歯が見えた。

「僕をかい？ 一体ここはどこかい？」

彼女は質問には答えず手招きして城の中へ入っていく。横に立っている従者の顔を見た。犬だ。それもダックスフンド系の凛々しい顔をしているが、表情はない。ええい、ままよと僕は彼女についていった。鼻をくすぐる花びらのような香りがした。

古城の大扉は軋みを立てて開いた。中は思った以上に暗く、余り視界が利かない。そして広い。入った大広間の正面に大きな階段があり二階に通じているようだ。床には中心に沿って紋章のような模

様の入った青い絨毯が引いてあり、左右にいかめしい彫像が並んで立っていて、振り返ると入り口にはくすんだ騎士の甲冑が飾つてるのがわかった。ここはヨーロッパなのだろうか。女性は右手奥の部屋の黒い木製の扉を開けて、僕が入るのを待っている。僕は恐る恐る部屋の中を覗き込んだ。大きな窓があり、室内は明るく、部屋の内部が一瞥できた。中央に青色のソファがあり、そこに一人の男が座っていた。他にも大きな机と本棚が目についたが、その前にその初老の男が立ち上がってこちらに歩いてきたので部屋の識別はそこまでになった。

「ようこそ、アタモゲール君。キミが来て祖国クルスビアに貢献してくれるのを待っていた。私はスポポマスと言う。よろしく」

といわれ、握手を無理やりされて、部屋に連れ込まれた。女性が静かに扉を閉め、僕は男と真向かいのソファに腰を下ろした。と言うよりは座らされたと言うべきか。頭の中は混乱の渦にある。

そんな事はどこ吹く風でスポポマスはファイルを取り出し、僕の前を開いた。質問できる空気にならない。

「そこでだ、アタモゲール君。早速キミの任務を伝えよう。毎晩2時にここより南南西に浮かぶゲトウマナーの星の色を観察してほしいのだ。二階の展望台には撮影機能、転送機能付きの高性能望遠鏡、シヤノスという名前だがね、それが備え付けてあるから欠かさず毎晩頼むよ。ゲトウマナーは今白色に輝いているが、これが黄味がかつてくるとこの国は大変な混乱に見舞われるのだ。だからしっかりと頼むよ」

それだけ言うとスポポマスは灰色のジャケットから虹色の葉巻を取り出して、丸いライターでしゅっと音を立てて火を付けた。お風呂のソープのようなとても爽やかで、なおかつ魅惑的な柑橘系の匂いが部屋に満ちた。僕はさすがにそのまま、はい、わかりました、などと言えず質問をまくしたてた。

「ちょっと待ってください、まず、ここはどこなんですか」

「さっきも言ったろう、クルスビア国だよ」スポポマスは当然と言

う風に答える。

「いや、あの、じゃあここは地球ですよ？時代は？」

彼は葉巻をくゆらせ、地球とは何か知らないが、ここはアストル星で、時代は陽暦2021年だよ、とこともなげに答えた。

「キミたちは知らないのだろうが、次元は複雑に組み重なっていて、条件次第で相互に行き来も出来るのだよ。アタモゲール君もきつと別次元から来たんだろう。それはどうでもいい。問題は、あの紅茶を飲んだか否かにすぎない」

「あの紅茶って、ええと、WHERE GET HOPEの紅茶の事？」

「さよう。それによってキミはこの国の住人たる諸権利を得たのだ。この城は廃城だが住むには十分だ。召使いも一人いる。そのゲベナスだよ」

ゲベナスと呼ばれた女性がスカートを少し持ち上げて一礼した。西洋風だな、と僕は思った。顔は和風そのものなので妙に滑稽ではある。しかも名前がゲベナスって。僕は内心苦笑していた。

「では、約束どおり頼むよ。困った事があればなんでもゲベナスに聞くんだよ」

スポポマスは灰皿に葉巻を押し付け、もう一度僕と握手をして、大股に部屋から出て行った。

僕は放心状態だった。全く何がなんだかわからない。視線を感じるので仰ぎ見るとゲベナスと呼ばれたあの女性がにこやかにそこにいた。

「君さ、あの喫茶店の子だよ」

「そうです。あちらの世界であなたを待つておりました」

「僕を？そうすると、あの店はそのためだけにあつたのかい」

「正確に言いますと、あの店を発見出来る人を待つていたのです」

「じゃあなぜ僕には見えただろう」

「詳しくはわかりませんが、見える人にしか見えません」

僕は頭が痛くなってきた。窓のほうへ行き、外の景色を眺める。連れて来られた道と反対側らしく、まず眼前に大きく広がる湖が見えた。水面が太陽の光を反射して美しく映え、その横に緑の濃い森林が広がっている。その周りには牧草地帯や荒地が混在している。人家らしき物は見えない。

「景色は上等だな」とそつとつぶやく。山岳を上りきった場所に城が建っているからだろう。後ろを向くとゲベナスはいなくなっていた。部屋を見渡す。まず中央にソファーとしつかりした造りのテーブルがあり、窓の横手には大きな勉強机らしき物がある。本棚は二つあるが、背表紙の文字は全く解読不可能なので読めないだろう。反対側の壁際には古いが清潔そうなシートがあつらえてあるベッド。後は、ハンガー掛けらしき物があるのみだ。壁は白く、ひびが点在していて、殴れば壁から粉が吹き出そうだ。ここに寝泊りするハメになるのか、と僕はため息をついた。何しろ帰れる方法が全く思いつかない。ああ、とにかく一通り見るぞ、と僕はやけくそになって部屋を出た。

* * *

夜になった。蒸し暑さは消え、城内は殆ど真っ暗闇になる。明かりと言えばランプの光のみで、その炎はアルコールを燃料としている。散策した城内は本などで読む西洋の古い城そのもので、文化的にはこのアストル星とやらは18世紀のヨーロッパ程度かな、と僕は思った。ゲベナスが厨房で食事を作っているのも見たが、コンロは薪を使っていた。君はどこに住んでいるの、と聞くと、この地下です、とだけ言う。口数の少ない女性だ。年齢を聞くと25だと言うので僕とは10歳違うわけだ。一瞬、妙な欲望に捉われたが、僕はすぐに打ち消した。夕食に作られたのはラザニアと野菜サラダとスープだった。食堂のような部屋で一人で食べる。

「一緒に食べないかい」

と聞いたが、首を振り地下へ降りていった。ご丁寧な例の紅茶が入れてある。飲むべきか迷ったが結局飲まなかった。食堂のテーブルは無駄に大きく美しく、料理は美味だったにもかかわらず、寂しさを感じずにいられなかった。とにかく腹を膨らまし、二階へと上がった。ところどころ室内がむき出しになっているので、今はいいが冬は寒いだろうな、と想像した。きちんと工学的バランスを取って計8部屋存在したが、いずれもがらみどこの廃墟に過ぎなかった。そして、中央からバルコニーに出ると、確かに一台の大きな望遠鏡がある。天幕のようなカバーが付いてあり、スポポマスの残した資料片手に触つてみると、すぐに方角と位置がセットされ、レンズの向こうに真っ白に輝くきらびやかな星が目に入った。こういう精密機械だけは現代日本に近いのか、と僕は納得した。これがゲトウマネーの星か、と思いつながら、食堂から持ってきた小さな時計を見ると、まだ9時半である。

「待てよ、毎晩2時に情報を送信しろと言う事は、それまで起きないと駄目なんだな」

と僕は独り言を言った。これは困ったぞ。全くと言っていいほど娯楽がない。自分の部屋に戻ったが、四つほどあるランプの光だけでは薄暗く、何も出来ない。それでもとにかく暇なので、ために片端から本棚の本を読んだが、全部何語も見当もつかない有様だ。暇を持て余した僕は地下へ降り、ゲベナスの部屋を探したが、4つほどある薄汚れた木扉はどれも同じに見える。しょうがないので大きな声をあげて彼女を呼んだ。

「ゲベナスさん。お願いがあるんですけどー」

すると一つの木戸が開き、寝巻きらしき姿の彼女が現れた。明らかに警戒されているのがわかる。そうじゃないんだ、と言うオーラを出しながら、何か暇を潰せる物はないですか、僕が読める本ですか、と聞いた。

「アタモゲール様にも読める本ですと、これはどうでしょう」

と、渡されたのは『超越的存在と弁証法の限界』と言う本だった。

僕は丁重にお返しして、一階に戻った。寝たらずい、そうだ、外へ行ってみよう。思い立って重い正面扉を開け、城外へ出た。すると、つたの茂る正門が開かない。鍵がかかっているようだ。乗り越えるか？と一瞬考えたが、足のかけ場が無いので無理のようだ。そこで、とにかく庭を一周してみた。樫や樅の木が無数に生い茂っている。無駄に城壁が高く、棒高跳びでもしないと出られそうもない。一周して、見事に監禁されていることがわかった。思わず仰ぎ見た夜空の異常に気づいた。月が、二つある！ しかも、一つは青、一つは黄緑に輝いていた。

僕は自分がつくづく異世界へやってきた事を実感した。大体、この門の外に出てもどこへ行けばいいのかわからない。僕は重い足取りで部屋へ戻り、ベッドに仰臥して何も考えずにいた。知らぬうちに、過去の様々な出来事を思い起こしていた。家族の顔や友人の顔、それぞれの楽しい思い出が優先して思い出された。まどろみの中に午前2時が来たので、二階のバルコニーへ出て、ゲトウマナーの星を撮影し、どこへか分らないが指定どおりの順序で送信した。僕のこの世界の役割は、これだけ。

なんとなく苛々した僕は、シャドーボクシングをした。頭上では二つの月が光輝を競っていた。

* * *

日々は何の変化も無くただ過ぎていった。カレンダーが無いので貰った紙で無理やりこしらえた。そうしないと、今がいつだかの感覚が失せるからだった。

僕は台所の棚にあるウイスキーをよく飲んだ。する事が無いので酔って紛らわそうと思ったのだが、生来酒に強くないので、やがて飲むのをやめてしまった。

三度三度の食事と洗濯と掃除はあのゲベナスがするのだが、余り

に暇なので僕もしばしば手伝った。ゲベナスは二日に一度ほどどこかへ食料の買出しに出かけていくので、僕も着いて行きたいと申し出ると、穏やかに却下された。少なくともゲベナスは正門を開く鍵を持ってゐるらしい。僕は、ある日決心し、それを奪おうと彼女に迫った。すると、途端に金縛りに遭い、全く動けなくなった。

「アタモゲーラ様、使命を果たす前にここから出る事は出来ません。考えを正すと元に戻ります」

言われたとおり、彼女から鍵を奪う考えを止めると元通りになれた。これでは脱出は、不可能だ。僕は抵抗、脱出の気持ちを日に日に失っていった。元の世界に帰りたいとは思うものの、戻って何をやる？何が待っている？そう考えると憂鬱が襲ってくる。会社は辞め、彼女には捨てられ、何も無い。それに引き換えここは、深夜の天体観測以外は何もしなくていい。しかも女中は美しい女の子だ。退屈さえ克服出来れば、このほうがよっぽどいいんじゃないか、とすら思うようになってきていた。

人は、衣食住がとりあえず安定する事を求める。マズローの五段階の欲求というやつだ。だが、人間は退屈には耐えられないのだと僕は知った。

ある晩から、悶々とした暗い欲望に苛まれるようになった。地下には一人の若々しい健康な美しい女性がいる。僕は、とある瞬間に理性が敗北したのを感じた。ふらふらと地下室へ歩いていき、ゲベナスに腹痛を訴えた。彼女はすぐに扉を開いた。僕は彼女に覆いかぶさった。彼女は拒否はしなかった。来るべき時が来た、と言う表情で僕の相手をいつまでもした。僕は避妊もせず解放された快楽に身を委ねた。僕は一つの怖れを克服した。不能になっているのではないか、と言うものだったが、呆れるほど杞憂に終わった。僕は彼女の中で爆ぜた。

毎晩2時の定期観測が終わると眠り、朝は遅くに起き出して、彼女を捕まえてベッドに連れ込んだ。それは至福の日々だったに違いない。働かず、家事もせず、ひたすらゲベナスとの性行為に耽った。彼女の胸に甘えた。白い素肌を晒した彼女は頬をほんのり染めて、アタモゲール様の愛を感じます、と言ってくれた。が、僕はその時はととした。僕は彼女を愛してもいけないのに欲望のままにゲベナスを抱いてしまっていた。僕は強く恥じた。ひよっとして、今までもこうだったんじゃないか？僕は夜な夜な考え込んで、こう結論付けた。僕は女性の人格ではなく外見や肉体を愛していた。そりゃ結婚してもらえないわけだ。泣きべそをかきながら僕は笑った。

それ以降、ゲベナスを抱くのに嫌悪感を感じるようになった。少なくとも朝から晩までセックスするような墮落の生活自体も僕には無理だった。僕は彼女との行為を抑制し、代わりに庭で剣道の真似事を始めた。元々高校まで道場に通っており、二段の腕前だった。手ごろな木の棒を拾い、握る部分に布を撒き、朝から晩まで無意味に素振りを繰り返していた。背中の筋肉が痙攣するほど振りぬいて、汗まみれになって井戸の水を浴びた。そう言えば、この星の季節はいつまでも真夏らしい。毎日手製の木刀を振っていると、僕流の言葉で言うと無我の境地にしばしば辿り着いた。主客未分の軽い恍惚状態にはまった。僕はその状態を一人楽しんでいた。

ある日、机の引き出しを開けていると、彫刻刀のセットを発見した。何か彫ってみるか、と軽い気分で庭から薪を取ってきた。この薪はあの犬の従者が二日に一度大量に運んでくる。まず僕自身の名前を彫ってみた。案外上手に彫れたので、部屋の扉の横にテープで貼っておいたら、ゲベナスが怪訝な顔で、アタモゲール様、これはなんですか、と聞かれたので、僕の本名さ、と言うと珍しく声を出して笑った。若干ふてくされた僕は、彼女を相手にせず、ひたすら色々彫ってみた。果物、野菜、電車、船など色々彫りあげた。ゆっ

くり力を込めて刀を動かせば、それなりの形にはなるものだ。何しる時間は幾らでもある。少しずつ上達し、ある時は蛇を彫って。ゲベナスに見せると嫌々をして逃げて行った。僕は意地悪を發揮して蛙だの蜘蛛だのをこしらえて食堂などに置いておいた。かすかに悲鳴が聞こえると僕はほくそ笑んだ。それらは全て翌日僕の部屋の机に戻されていた。僕は間違いなくゲベナスに恋をしていたのだろう。好きな娘に悪戯するというやつだ。だが、ふと考えた。もしも、だが、僕がいつか元の世界に帰る事になったら。もう会えないんだろうな、と思った。

ゲベナスとは本当に色々な会話をした。だが、彼女は余り僕の質問には答えないので、仕方ないので僕自身の話や、地球と言っか、日本の話をした。彼女は日本の事は少しだけ知っていたが、基本的に地球の事は余り知らなかったので、興味深く僕の大して面白くも無い話、例えば地球には海があつて、体長30mもあるクジラという生き物がある、と言うような話を感心して聞いていた。

「地球を今支配しているのは間違いなく霊長類ヒト科、ホモサピエンスである僕達だな。だが、いつまで続くかな」

「アストル星では人間以外も政治にも参加しているようですよ」

「そのほうがいいね、地球は人間のエゴが強すぎるから」

ゲベナスはそんな事を言う僕の顔をじっと見つめた。あなたも人間じゃない、とでも言いたげな顔だった。僕は照れくさくなって咳払いをし、話題を変えた。

僕は日記をつけるようになっていた。だが、書くことなどほとんど無い。今日はゲベナスと一緒にミートパスタを作った、木刀の素振り1000回した、今日はチヨウチヨを彫った、こんなものだ。でも、何かを書いておきたかった。なぜかの明確な理由は説明できない。あえて言うならゲベナス以外の全ての存在に忘れられている自分の存在証明のようなものかもしれない。ともかくも僕は、正確

に数え始めてからだが、およそ半年もの間ずっとこの古城にゲベナスと二人でいたのだった。その間毎日あの紅茶を飲んでいて。憂鬱や悩む心はほとんど消え去ってしまっていた。

* * *

あるおぼろ月夜に、遂に変化がやってきた。いつものように夜中の2時前に二階のバルコニーに上がり、情性で望遠鏡を覗いた。僕の胸は轟いた。ゲトウマナーの星が黄色に燃えている。裸眼で確認してもその異常な輝きが分かった。すぐに画像を送信する。いや、肉眼でわかるのだから、とっくに受け手も気づいているのではないか？ そう思った瞬間、空が振動した。何かが大きくひび割れるような、体の芯に響く音がする。僕は思わず室内に駆け込んだ。突如、空に暗雲がたなびいてきた。入り口を閉めて、ガラス窓越しに僕は突如変わり行く夜空を見つめていた。

「アタモゲール様……」

気づくとゲベナスがそばに来ていた。彼女の肩を抱く。

「ゲトウマナーの星が変色したよ。黄金に近い黄色に燃えてた」

「ああ！ なんと言うことでしょう。禍々しいことがすぐに起こりますわ」

その時、夜空が引き裂かれたのが見えた。そこから、異形の大きな体をした禍々しい化け物が次々に現れた。僕はそれを呆然と見ていた。と、遙か遠くの大地から、船のようなものが次々飛び立った。「星の防衛戦士達が立ち向かっているのです。これからこの星には他にも様々な災いが襲うでしょう。浄化の時が来たのです」

「浄化だって……」

その時、大地がぐらりと揺れた。揺れの程度は知れているが、なんと見える彼方の大地が引き裂かれてゆく。ゲベナスは言葉を続けた。

「しかし、それはこの星の問題に過ぎません。アタモゲール様は元

の世界に帰らないといけません」

帰れる。その時が来たのか。しかし、こんな状態の星にゲベナスを置いていくわけにはいかない。

「ゲベナス、君と別れたくない。一緒に帰ろう」

僕は、もう嘘をつけない。偽りの心で彼女を抱いていたんじゃないんだ、と大声で伝えたかった。が、その前にゲベナスは寂しそうに微笑み、僕のおでこに白い手をかけた。そして、何かそつと囁いた。とたん、僕の視界が歪み、意識を失った。

* * *

気づけば僕の部屋だった。僕はまず携帯を見た。20xx年8月4日。なんと言うことだ、あの日に戻ってきたのか。服を見る。向こうで着ていた薄着の木綿ではなく、最初に着ていたTシャツのままだ。だが、体つきは変わっている。向こうで暇に任せて木刀を振りまくったおかげで筋肉質になっている。台所へ行った。ない。あの紅茶が。僕はサンダルをはいて、記憶に残っているあの店に走った。やがて、その場所についた。確かにここのはずだが、そこはただの駐車場だった。思わず天を仰いだ。ゲベナスの最後の言葉が甦った。

モラトリウムは、終わりね

そうか、僕を休ませるために、誰かがあんな世界に呼んでくれたんだな、と思った。同時に、二度とゲベナスに会えないと思うと急に胸が痛んだ。切なくて泣き出しそうだった。だが、それは弱さだ、と僕は歯を食いしばった。本来、会うことすら出来なかったはずの子だ。

僕は、この自分の世界で新たな愛せる人を探さないといけない。ふと思った。半年間も休んでいたんだな、と。それは僕にとって

余りにも価値のあるものだった。また、歩き出せる。僕は大きく深呼吸をして、ゆっくりと確かな足取りで家へと帰っていった。(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3054j/>

紅茶と僕のモラトリアム

2010年12月20日13時41分発行